

# LIBRARY NEWS

第6号



## ときめきから

東京藝術大学学長 宮田 亮平



科学技術、経済優先の現代社会の中で、美を追求する人材育成を、最先端で指揮する東京藝術大学学長宮田亮平氏に、インタビューさせていただきました。

—大学図書館の充実・整備状況について伺わせてください。

**宮田** 本学は、奏楽堂と大学美術館を教育研究成果の発信の場として掲げているため、附属図書館は多少影に隠れてしまいがちです。大学は知の集積を行う場であるとともにその成果の発信も行わなくてはなりません。そして、その発信とともに新たな知を醸造する必要性がでてきますので、知を蓄える材料と図書館が直結していることはとても大事なことです。本学の附属図書館については、学生や研究者が必要となる資料を所蔵する芸術専門図書館としての機能を持っているため、今後も充実させていく必要があると考えています。

現在しきりと叫ばれているデジタル化やアーカイブについては、整理したデータをどの様に活用するかも含めて検討することがとても重要になってくると思っています。

—卒業制作の買上げや、画廊との取引も毎年あると伺っておりますが

**宮田** 卒業修了制作の内、優秀な作品については、大学で毎年買上げることにしています。画廊関係については、学生が醸造した夢を買っていただいているのでしょうか。もしかしたらお宝ということもあるかも知れません(笑)。

区役所や大学校舎等に作品を飾りたいという事で、購入していただくこともあります。

—東京藝術大学の創立は

**宮田** 旧文部省に明治12年に音楽取調掛が、明治18年に図画取調掛が設置され、本学の前身ができたのです。明治20年にそれぞれ東京音楽学校、東京美術学校と改称されてから122年間、本学は芸術の専門教育および研究機関として、数多くの卒業生、研究者を通じて我が国の芸術界で大きな役割を果たしてきました。

当時の音楽取調掛は、東京大学赤門そばにあった文部省用地内の旧外国人官舎にありました。大変大きな建物だったと聞いていたのですが、東大創立130周年の時に、上野の山から東大を写した写真を見せられたところ、本当にでっかい建物

がひとつあって、それがその建物の様です。

―当時の藝大の役割は

**宮田** 本学は、明治政府が西欧列強に伍していくためには、産業と同時に芸術教育が重要であるとして設立されたのです。当時、日本が西洋に近づきたいという意識があったのだと想像できますね。

東京美術学校創立に尽力した岡倉天心は、早くから西洋を取り入れ、横浜の宣教師宅に毎日通い英語を学びました。ですから7歳ですでに英会話ができたのです。その後、東京大学を卒業し、旧文部省に勤めている間に、廃仏毀釈など日本文化受難の時を迎えたのです。「ちよつと待て、日本文化はもつと素晴らしいぞ」ということを言うために天心は美術学校に來ました。一方で黒田清輝が西洋で油絵を勉強して帰ってきます。そんな時に岡倉天心は制服を作るのです。しかし、どう見ても貧乏つたらしい聖徳太子みたいなデザインなんですよ(笑)。当然、西洋から帰って来た人たちは、蝶ネクタイに三つ揃いですから、確執が生まれるわけです。5〜6年しか持たなかつたんじゃないのかな。でも僕は、これは面白いと思いついて、創立120周年を迎える直前の卒業式のとときにその格好で登場したのです。

―日本の古きを知り、西洋の歴史の中で音楽、美術がぶつかったんですね。

**宮田** その中で日本も独自のものをという覚悟が生まれてきたのです。最初は「蜩の光」のように、スコットランド民謡のすばらしい旋律をアレンジして唱歌とし

ていましたが、滝廉太郎など本学で学んだ人たちが、オリジナルの唱歌を作曲するようになるわけです。日本人の素晴らしさは、融合の文化を持っていることです。最初は丸呑み(真似)するのですが、そのうち日本独特の感性を加え、より優れたものを創り出していくようになります。これは小さな島の中で、人々が上手く融合していくための技なのでしょうね。日本人の誇るべき能力だと思います。

―融合しながら文化を創っていったというところでしうか。藝大が最前線を行くなか、この不況下で産業界、経済界と結びつくことは難しく不是吗？

**宮田** 僕は「芸術は産業界である」と言い切っています。ですから産業界・経済界とも結びつくのです。「風が吹けば桶屋が儲かる」という例え話がありますが、あの話よりももつと近い関係に両者はあると思っています。直近とまではいきませんが、世の中に優れた芸術作品を置くことで、社会のモラルは向上し、より高みに昇ることができます。つまり、芸術が広まれば社会は活性化するわけです。本学としては、そうしたことを通じて社会貢献できると訴えていきたいですね。

よく「芸術は難しいんじゃないですか」と聞かれるのですが、僕は「そんなことはありません。芸術はとても身近なものです」と常日頃から言っています。ですから、産業界、経済界と自然と結びついていくのです。

―高等教育では科学技術・工学へ重点が

置かれているようですが。

**宮田** 昔から日本は、優れたものを安く作り、輸出することで発展してきました。しかし、もう安いものを輸出する時代は過ぎてしまいました。そうしたときに必要となるのが「感性」なんです。その感性を呼び起こすきっかけは「芸術」や「ときめき」なんです。僕は、藝大アクションプランでいろいろなことを書いていますが、世にときめきが充ち満ちることで日本全体の活性化が図られると考えています。ですから、もつと芸術に目を向けてもらえるよう努力していきたいですね。

―文化を背負って立てる、リードしている人材育成に、高等教育はどのように関わりあえますか？

**宮田** 特に学生には、競うというのはどういう事なのかを伝えていきます。自分の中に昨日と違う今日の自分があります。今日の自分も素敵だけと明日はもつと素敵をすべきかというところが大切なのです。それはつまり、他人と競い、勝つた負けつたというのではなく、まずは自らを磨くことが重要だということなのです。

―作品を創り続ける情熱は、何処から湧いてくるものなのでしょう。就職しちゃうおうとか考えませんか？

**宮田** 僕は就職したことがないんです(笑)。本学では全体の8割程度の学生は、企業等へ就職しません。何故かという自分自身に就職しているからです。自分に懸けています。自分に未来像を求めている訳で

す。僕も同じです。ですから、いまだに卒業できていません。自分の中でやらなければならぬことが、まだ大学に残っていると感じているからです。その想いが続く限り挑戦し続けていけると思っています。

―全ての学生に約束された将来がある訳じゃないですが

**宮田** 全然、全然。一つやることで、もしかしら次のものが見えてきます。でも、やらなかつたら、見えてきません。その一つひとつを「よし、やってみようか」と思うことが大切なのです。人に言われたからやるのでは駄目なんですね。

―例えば本学の工芸科の学生は、世の職人さんが、5年や10年かけて修行しないと一人前になれることを、3年生になって初めて専攻し学びます。そして2年間で卒業制作作品としてその成果を発表するわけです。「自分がやらなきゃ、誰がやるんだ」というモチベーションを持ってやるから可能なんです。ですから、聞くときも真剣ですよ。教える僕らも常に真剣です。直ぐに結果が出るんですよ。教え方が悪かつたら、彼らは制作出来ないんです。失敗するし、怪我をするわけです。その怪我は、外傷もありますが、心の傷もあるのです。「先生の言ったとおりにやつただけど出来なかつた」ということは、自分に能力が足りないと思ってしまう。それは絶対にやってはいけないことですから、教員が指導するというのは、自分の作品を創るよりも大変なんです。だから面白いのです。評価は常にそこに歴然と現れてくるわけですよ。そうした常に

いい緊張感を持って指導にあたることで、いい学生が輩出されていくわけです。

―テストではないので、決まった答えのないことを教えるのは如何ですか。

**宮田** 人はどうしても自分の得意とする方面に偏ってしまいます。ようは腕を片方しか持たないようなものです。最初からバランスのとれている人はいません。そこでもう片腕を自分にはないものを学んだり周囲の人から教わろうと頑張るのです。両腕が揃えば、バランスもとれ何倍もの仕事が出来るわけじゃないですか。ですから、自分には偏りがあるという事を自覚することが正しい進歩のスタートラインを切ることになると思うのです。「興味ない」とか「別に」とか「どっちでもいい」などの言葉を子どもたちから聞くと悲しくなります。様々なものに興味を持ち、ときめくものとの出会いを大切にしていってほしいですね。



東京美術学校創立当時の制服で登場する宮田学長

―技術の蓄積・修行は如何ですか

**宮田** 芸術というのは、作品制作の責任が確実に自分に戻ってくる世界なんです。制作をする際はもの凄く悩むわけですよ。その葛藤ができることが素晴らしい。自分で悩み抜いて出した結果ですから、責任転嫁はできません。出来上がった作品が、良いとか悪いとかが問題じゃないんです。そのプロセスの中で苦悩することによって、ピュアな自分に持つていくということが、素晴らしい人間形成に繋がると僕は思っています。

―場所として、器として、人として、大学のキャンパスの中で人が生まれるというか、育っていくという喜びは？

**宮田** 素晴らしい経験です。ですから、僕は宝物と言っています。卒業式では一番先に大泣きしたいくらいですよ(笑)。目の前で泣いている学生たちが見えるのか、それに堪えながら喋るんです。こんなにきついことはないですよ。

皆が「ありがとうございます」と僕に言ってくれるのですが、「それは違うよ、僕はあなたたちのただの鏡なんだ。自分たちへのありがとうを受け止めて、あなたたちに返しているだけなんだよ。自分たちに感謝しなさい。そのきっかけ作りを僕は行っただけで、賞賛すべきは、あなたたちそのものなんだから」と会場の外で皆に伝えるんです。

―大学の中で、学生と一緒に居られるというの、かなり嬉しいことでしょうか。  
**宮田** いや、かなりどころじゃない、最

高の幸せですよ。そうした学生との交流があるから、僕は、今こうして大学で学長をやっているんです。

―大学運営についてお聞かせください。  
文部科学省科学研究費補助金(以下「科研費」)に新項目として「芸術学」という項目を企てたりとか、「真、善、美」の善、美(思想・哲学、音楽・美術)の重点のかけ方についてハッキリさせる時期が来ていると思いますか如何でしょうか。

**宮田** 来ていると思います。国立大学法人は運営費交付金と学生納付金などで運営されています。その運営費交付金が、現在、毎年1%ずつ減額されています。それが3%に深堀りされるかもしれないというときに、科研費の採択率で運営費交付金のカウントが変わるかもしれないという話が出てきました。夢だけで運営することはできませんから、様々な場所で現状を訴え、「芸術学」という新たな項目を新設してもらいました。

これからは大学全体で頑張る番です。科研費は応募しないと貰えないのですから。その結果、応募数が3倍だったかな、先生方の意識も変わりました。僕も教員のとときに自分で科研費をとっています。そこにある銅鑼は科研費で制作したものです。なんです。この大きさの手作りの銅鑼で、日本の音色が出せるようになったのは科研費のお陰なんです。新しい日本の音響文化が、ハンディで使えるようになったわけです。中国の銅鑼のジャーンではなく、歌舞伎の銅鑼は、梵鐘のようだけどその一発の音で舞台を全て変え

ずに、明るさを調整することで、昼から夜に変えることが出来るのです。思い浮かべてください。「どおーん」、そして「すーっ」と音色が消えるのと同じくらいに、ライトが暗転するんです。

―最後に、座右の銘、座右の書がございましたら

**宮田** 常に新しいものに挑戦したいのでありません。座右の銘はありませんが好きな言葉はいくつかあります。例えば、「鼻歌交じりの命がけ」とか、「人の笑顔は自分の心」とかね。

最後に、冒頭でお話しました本学の附属図書館を今後も充実させ、本学にしかなくアーカイブ、芸術専門図書館にするべく頑張っていきたいと思っております。

―貴重な時間ありがとうございました。

(取材2009年2月26日)



宮田学長制作の銅鑼